慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	巻頭言
Sub Title	
Author	奥田, 敦(Okuda, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014
Jtitle	Keio SFC journal Vol.14, No.1 (2014.) ,p.3- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 SFCが拓く知の方法論
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1401--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集　SFCが拓く知の方法論

巻頭言

KEIO SFC JOURNAL Vol.14 No.1 特集編集委員

奥田 敦
慶應義塾大学総合政策学部教授

アラビヤ語の現地研修で8月の末からヨルダンの首都アンマーンに滞在している。いまや中東地域で唯一、安全にアラビヤ語の研修を行える場所である。ヨルダン大学の広大なキャンパスの隣接する地区にある宿舎周辺は、終わりかけている夏の、さして痛くもない日差しの中で、激しい車の往来をBGMに、近くのビル建設現場に資材を運んできたトラックのクラクションがだるく響く日常が繰り返されている。

しかしながら、ひとたび衛星放送のチャンネルを回すと、この場所が、戦乱の炎に囲まれている現実に引き戻される。国境を接するシリア、イラク、パレスチナ。そしてイエメン、リビア。すべて内戦状態を抱え、一般の人々の生命が奪われ、財産が破壊される危機的状況に晒されている国々である。手に手に武器をもって、それを高くふりあげては雄叫びを上げる若者たちの映像に、「ペンはどこに行った」とつぶやいていた。「ペンは剣よりも強い」。慶應義塾がペンマークをシンボルとする由来になっている言葉であり、エムブレムには、その言葉自体が刻まれてもいる。学びの尊さを表現しているというが、ニュースに映し出される現実はそんなこととは無縁である。

剣を暴力による支配と読み替えてみるならば、剣を振り回しているのは、何もアンマーンのテレビに繰り返し映し出される彼らだけではない。圧倒的な剣の威力の前で、剣を助けるペンはあっても、剣を制するペンはない。現代というのはそんな時代である。だからこそ、既存の枠組みにとらわれない自由な発想の研究や活動が必要であり、だからこそ、SFCでの研究や活動には世界史的な意味がある。

とはいえ難しいのが、総合政策学部、環境情報学部、あるいは、政策・メ

ディア研究科での学びの性質である。一言で言えば、問題発見解決型の研究教育ということになるが、そこには特定のディシプリンも既定の方法論もない。むしろ学びの数だけテーマがあり、学びの数だけディシプリンの組み合わせがあり、学びの数だけ方法があることになる。

したがって、SFC に何か一つの決定的な学びの方法があるわけではない。とはいいながら、研究の対象としての問題に、――『KEIO SFC JOURNAL』でも特集が組めるように――ある程度のまとまりを見出せるのであるから、方法についても同様にある程度の括りでこれをまとめることができそうである。

そこで、今号の特集では、既存の枠組みにとらわれない学問領域横断的な研究分野の中からいくつかを取り上げ、それらの方法論にフォーカスし、SFC の知のダイナミズムの秘密に迫っていくことにした。エヴィデンスに基づく地域介入法、グラウンディッド・セオリー・アプローチ、パーソナル・ゲノムのリテラシー教育法、マルチメディア・データベース・システム、実践的デザインリサーチ、オーラル・ヒストリー・メソッド、パターン・ランゲージ、方法論としてのイスラームからの論考を取り上げた。

担当編集委員として、とても安心したことだが、寄せられた研究がすべて、人間への関心と愛と信頼に溢れていた。人間への関心と愛と信頼が裏切られ、踏み躙られている世界的な状況を顧みたとき、SFC における研究・活動は、なるほど時代が求めているものなのだとも思う。

ところで「ペンは剣よりも強い」という格言の来歴を調べてみると、「ペン」の意味するところは、政府の逮捕状であり、令状であったという。暴力に訴えて、政府に逆らってみても、逮捕状を出されてしまえばおしまいなのだ、だから、ペンは剣より強いのだと。

現在この地上で横行しているのは、逮捕状を出すことのできない暴力である。なるほど、「ペンは剣より強し」に現実味がないわけだ。しかし、ペンは、逮捕状を書くだけのものであろうか。イスラームの聖典クルアーンで最初に下された 5 つの聖句の中で、アッラーは、ペンによって教えた、人間の知らなかったことを教えたという。ここには、ペンによって、つまり書くことによって、教えてもらえる真理の存在を垣間見ることができる。それは、ペンによって真理をつかみ、人々が、剣によらずに幸福裡に暮らすための智恵をつかみ、

自分自身に刻むことではなかろうか。

本号が、問題発見解決のキャンパスに集う一人一人にとって、慈しみと信頼に満ちた世界を作り出すため、真理を究めるペンとしての学問方法論への関心を持ち、それを研ぎ澄ます契機になればと思う。